

武道德育研究所新考察

野
木
將
典

目 次

- 一、はじめに
- 一、武道徳育研究所新考察
 - 1、「人間科学研究センター」(仮称)
 - 2、人間健康運動科学研究部門
 - 3、日本精神文化科学研究部門
- 一、武道研究所趣意書
- 一、開所宣言
- 一、國士とは
- 一、國士館設立趣旨
 - 一、國士館設立趣旨現代的表现文
 - 一、國士館再建趣意書
 - 一、國士館再建趣意現代的表现文
- 一、理事長西原春夫語録
 - 1、理事長就任講演
 - 2、ホームカミング・デイ
 - 3、國士館のビジョン
 - 4、青少年教育を語る

はじめに

武徳徳育研究所は本年設立二十五周年を迎えることとなりました。この節目にあたり私は研究所の目的つまり設立の意義を深く思料して次のような結論に立ちいたりしました。すなわち我が国の現在の紊乱した実情をかえりみて本来の日本のあるべき姿に復活させるべく本学に「人間科学研究センター」(仮称)なる研究機関を設立するという構想を打ちたてて見ました。

この構想は国際的な視野に立ちながら伝統的な精神や文化を復活させることによって、日本に再び斬新的な息吹を蘇えさせようとするところに目標を置いております。またこの構想の概要については次項に詳述してありますが、本学の発展は当然のことながら、また研究の活性化、学術の高揚化にも貢献するところ著大と確信しております。

本学の来たる百周年記念をめざして発展躍進を考えると、現理事長の采配に対して絶大なる期待を込め全教職員の自覚と努力に負うところ大なるものがあります。そこで理事長就任以来数々の講演等に見られる真意をつかむことが肝要かと思えます。また各大学に見られる建学精神や設立の目的が時代とともに風化しつつある現在本学の創立理念を再識することも大切と考え、理事長の語録並びに国士館設立趣旨をあえて掲載致しました。

最後にこの構想にあたって筑波大学芳賀脩光教授、国士館大学大学院一倉重美津客員教授の御協力をいただいたことを感謝致します。

武道徳育研究所新考察

1、「人間科学研究センター」（仮称）

二十一世紀における我が国の社会にあっては日本国尊厳の欠如、日本外交の弱体化、経済の低迷、また、高齢者の激増による社会福祉制度の対応、医療費支出の増大、教育の崩壊、家庭の崩壊、道徳の欠如など国家の根幹に関わる大きく厳しい課題を有しております。こうした現象は、戦後五〇有余年を経過した今日において、累積した日本の弱点・欠点を示しているものである。こうした中において、本校においては改めて二十一世紀における日本再生の理念を念頭に置き、創立者の建学精神をふまえ、人間において最も大切な日本の精神文化の基盤を世に問い、かつ、日本の精神文化の教育普及をはかり、我が国における有能な人材育成をはかることである。また、他方において、人間が誰でも健康で、長寿を保ち、幸福な満足感に満ちた生活を維持するための健康科学の推進、教育指導の充実、人材育成をはかることは極めて意義あることである。本研究センターは日本国、日本国民の新たな創造を目指し、精神文化の再進展、健康運動科学の推進、人材育成に貢献することを目的とし、

1. 日本精神文化科学研究部門

2. 人間健康運動科学研究部門

の二つの学術研究部門を併設したヒューマンライフサイエンスリサーチセンターを設立するものである。これら二つの研究部門は一定の体制を整備して、我が国の拠点的研究および教育・指導を推進し、将来の日本の顔として、あるいは日本の特徴ある姿として学術の分野における国際ネットワークを活用し、世界に問えるCOE (Center of Excellence) レベル、またはそれ以上の学問的高水準を保持するセンターを目標とするものである。

2、人間健康運動科学研究部門

Research Division of Health and Exercise Sciences

二十一世紀における我が国は、すでに指摘されているように、超高齢化社会の出現であり、医療福祉行政の対応は大きな課題である。他方、生活習慣病発症は若年化の一途にあり、健康増進や疾病予防の対策は中高齢期のものではなく、幼児期、児童期からすでに対応しなければならない問題となっている。

こうした点から、加齢、すなわち老化と健康維持増進に関わる運動科学、疾病予防に関わる運動科学を推進する。人間健康運動科学研究部門は科学技術創造立国を目指す我が国において、極めて重要な一分野である。その研究課題の一端を示すならば、児童期、発育期における肥満化予防と運動、青少年期の体力づくり運動トレーニングの効果と運動処方、中高年期の動脈硬化予防と運動等の課題については今後将来にわたって積極的に取り組まなければならない課題である。当研究部門は将来において専門的研究陣を配し、文部科学省のCOEに採択されるような世界的トップ水準の研究を行うものであり、研究集団になるための最大努力をするものである。

本ヒューマンライフサイエンス研究センターの設立は日本国民のすべての人々の精神と身体の健全な育成をはかるものである。

3、日本精神文化科学研究部門

Research Division of Japanese Spirit and Culture Sciences

わが国の国民に継承されてきた精神や哲学、道德倫理は古くから神学、仏数学、国学、史学あるいは武術等と一体化されて、長年の生活形体の中で形成されてきたものであり、それは文化的、学術的、道德的基盤を有しているものである。同時にそれは武道、華道、茶道等における「道」として国民の精神的・哲学的行動科学であり、人間形成の規範であり、教育の主体であった。

しかしながら、二〇世紀後半の半世紀においては、継承されてきた日本の精神、教育の基盤は日本の思想的混乱や過度に意識された民主主義や人権理論に圧迫され、今日においては、教育の崩壊、家庭の崩壊、道德の崩壊を招き、政治的にも政策的にも思想的混乱の中にある。こうした昨今の現状にあって日本の風土、環境から育まれた我が国における精神の根源を取り戻し、日本の精神的、学術的、文化的遺産を復活させ、教育の本体の再確立が不可欠である。日本精神文化科学研究部門はこうした点を学術的、学問的に探求すると共に、今日的、将来的な日本の教育再生、教育行政に寄与することを目的としている。今後においては日本を代表とする教授陣を配し、日本精神文化真髓の国際的展開をはかるものである。

武徳研究所趣意書

人類史の流れを鳥瞰すれば、三十年ないしは四十年を一つの節として、歴史路程はゆるやかな内にも截然とした軌道修正を試みるものである。それは人間の世代の交番の歷程と対応をなす点で、固体生命の周期が大きく関与している必然律でもある。日本の戦後史は、この歴史的必然律に従って、今や一つの転節ゾーンの中で脱皮を繰り返しているのである。

脆弱な文人としての進歩的文化人は、民族の内発的努力の賜物ではないという卑劣な理由で以て、日本民主主義の衆愚化の一切の責任を回避しようとしているが、民主主義が衆愚性向を内在している事実はずでにギリシャ時代に証明済みのものであったから、これは我々が日本現代史の中に感ずる閉塞感や敗亡感の責任を回避しうる正当な理由とはならない。

もちろん、民主主義には本来的に衆愚性向を内在しているとは云え、戦後の日本民族がかけがえない歴史路程の中で実験した民主化の努力の中には、世界的見地から展望してみた時、幾多の素晴らしい成果を達成していることも無視できない。重要なのは、だから、この内在的衆愚性向を矯正しながら、民主主義の豊かさだけを維持発展せしめうる新しい歴史法則、新しい哲学法則の模索である。

来るべき二十一世紀の人類史に、没落しゆく西欧に代ってオピニオン・リーダーたりうる日本民族を育成するための新しい歴史的哲学的法則の模索、ここに我々が新たに設立する國士館大学附属武徳研究所の研究活動の最重要の目的がある。

では、この歴史的哲学的法則のアウトラインを我々はどうのようなものとしてイメージしているかと云えば、多彩な日本精神史の伝統の中で、特に戦後の日本が敢て切り捨て、忘れ去ろうと狂奔した側面とでも云えばよいであろう。端的なチームを選べば、それは「和魂」である。「大和魂」というチームを用いずに「和魂」というチームを選んだところに、我々が決して民主主義を否定する反動イデオロギーの研究機関ではないことの表明意図がある。

日本民族は、かつて世界に誇るべき「文武両道」という調和のとれた「道」の哲学を構築し、実践し、生活化していた。文人と武人が鳥の両翼のように車の両輪のように調和していたならば、日本は慚愧にたえない敗戦の憂きめを見なかったであろうという歴史的反省は、今や良識ある日本人のコンセンサスとなっている。

ところが、戦前の武断主義のあつものに懲りて、日本人は、悲しいかな、文弱の弊にのめりこんでしまった。突如として社会問題化しはじめた少年少女の安易な自殺や、無目的的遊民化の現象に、親も教師も知識人もその原因の不明を云いのしるが、これはまぎれもなく、尚武を忘れ文弱に流れた戦後精神史の諸弊の顕現に他ならない。まさに亡国の兆である。

しかし、目をおおうばかりの文弱化と左傾的精神荒廃の中で、日本民族はたしかな足どりで精神的復原機能を發揮しはじめていることも慥かである。日本の津々浦々に武道の私塾が簇生している事実は、上から与えられた公教育ではなく、民族の地底から湧き出る私教育であるだけに、我々に強く希望を与えてくれる。

時やよし、國士館は創設者柴田徳次郎先生の創設主旨を現代に再興する時節に、歴史的に恵まれた訳である。日本的日本人としての國士の養成機関であり、國士の最高学府である我が國士館の本来的目標に邁進すべき時節に、今や日本歴史は遭遇したのである。

故に我々は、日本中に簇生しつつある「文武両道」への内発的希求性に一つの学的指針を与えるべく、具体的には別記のような研究テーマを個別に定立し、日本民族が獲得した東洋道德と西洋科学の全ての方法を駆使して、文武両道主義の「和魂」を闡明する所存である。

(別記は紙幅の都合で省略する)

昭和五十三年十一月四日

開 所 宣 言

総長 柴田梵天

昨今日本の教育事情は大変残念な情況であります。

ところが、幸いにも文部省は武道や徳育に強い関心を示しはじめました。

ここに設立いたしました武徳研究所の「武徳」という言葉は、おそらく若い諸君には聞き慣れないと思います。

しかし、これは、日本民族の精神的支柱となり、文武両道の道として先輩より受け継がれてきました。

今日は、まさに世界的な危機の時代であります。そこで、本研究所は、この難局を乗りこえうる真の國士の養成の新しい理念を示すために、研究活動に邁進する所存であります。

本研究所の設立を一番喜んで下さるのは前総長先生だと思えます。我々は自信をもってこれに応えていく所存であります。

昭和五十四年五月二十七日

國士とは

國士館創立者 柴田徳次郎

國士とは、悟つた者。悟つた者とは、例えば將棋の駒の歩の成つた様なものである。

將棋の駒の、飛車とか、角とかは、其數に限りがある。併し歩は澤山ある。

頂度、國家の大臣は、十名そこで、限りがあるが、一般國民は、五千萬でも、六千萬でも差支へない様に。

又學校なら、教師には限りがあるが、生徒では誰でもあり得る。又軍隊では、將校には制限があるが、一兵卒では誰でもあり得る。それでは、歩はつまらぬものと云ふに、どうして、なかなか、この歩が一度成つたら、大變な働きをする。大臣、必ずしも羨む必要はない。一無名の平民でも、悟つた者は、獨特の天地がある。働きがある。

學生でも、兵卒でも、會社の一社員でも同様である。

地位や、職業は何であつても、相當に練れた智慧を持つて、時と場所とに應じて、人も信じ、我も安ずる事の出来るものは國士である。

悟りとは、練れた智慧である。

智慧は誰にでもある。が練り方が足りない。ああ、どうしてよいか薩張りわからぬ。迷つたと云ふ。

迷ひといふことは、既に智慧である。

これをうんと辛抱して、練りぬくと悟りになる。

迷ひは煙で、悟りは火である。火の無い處に煙は無い。と昔の人が偉い事を教へて居る。ただ煙つてばかり居て、燃へ難いものもある様に、下手な考へ休むに似たりで、容易に悟れぬ人もあれば、短い月日に悟る人もある。それは人人の性質にもより、努力にもよる。併し、細い煙は火になつても細い火である。大なる迷ひある者の悟り程大悟である。この氣持を歌にして、

煙があれば必ず火あり、煙、迷ひで火はさとり。

迷ひの煙を飽くまであふげ、ばつと悟りの火があがる。
一度ついたら悟りの火だね、吹いて虚空をやきつくせ。

『國土館と教育』

國士館設立趣旨

物質文明の弊日に甚だしく、人は唯だ科學智を重んじて、徳性涵養を忘る今日に於て教育とは唯だ科學智の賣買たるのみ此の如きは唯だ物質文明に終る、精神文明なくして國家豈に一日の安きを得んや、蓋し精神文明は物質文明を統一指導するものなり、精巧の武器、萬種羅列するも、兵士起つて之を運用するに非るよりは、戰場に何の効果なからん、吾人は精神文明と精神教育とを此際に唱道して國家の柱石たる眞智識を養成せん事を期す。

一國の最高學府は未だ天下に公開されざるなり、若し公開さるゝとするも、ノート式の講義は畢竟死學のみ、其説く處高遠深邃なるが如きも、遂に之れ形式範疇のみ、何等の熱情なく、信念なし、人を化するの力なし、形式、規則、規律、試験、之れ今日の所謂教育なるものなり。

吾人茲に於てか卓落不羈高く形式の外に立つの士に依り、膝を交へて親しく活學を講ずるの道場を開設せんと欲す、法三章、唯だ眞に師たり弟たるの情誼に依つて之を維持せん事を期す、來る者は拒まず去る者は追わず、天空海濶他の羈束なく、唯だ自ら守るの禮節を尙ふのみ。

而して此の道場は大自在力を孕むの契機たるを期す、陋隘僅かに膝を容るるの一小寺小屋たりと雖も、大正維新の松蔭塾たるの効果あらん、一心足つて萬能始めて用ゆべし、我が道場の期する處は、心學なり活學なり、信念の交感なり、理を説いて理に墮せず、術を語つて術に溺れず、舌頭萬有を吐吞して方丈裏に風雲を捲かんとするに在り。

▲先生及講座時間表左の如し。

國士館講座時間及講師

▲毎七時より九時まで

月	時事及び財政	長島隆二
火	世界時事	中野正剛
水	人間學	柴田徳次郎

▲英獨語 火、金、日、ミセス、マチルド、カトウ、外に左の諸先生を補教として迎へ隨時講話を願ふ

木	金	土	涵	思想問題	佛教哲學	經濟	法	孟	對	軍	支	近東及中亞研究
宗	哲	經	養	濟	學	子	制	觀	史	學	研究	
教	學	濟	頭	邊	海	旭	田	尻	稻	次	郎	長
柴	阿	山	崎	源	二	郎	宮	島	大	八	寺	尾
田	部	秀	助	宗			江	木	衷		森	俊
玉							小	村	俊	三	郎	小
宗							瀨	鳳	輔			

▲又常に政治、實業各方面的實業家を招待し講話を請ふ

大民團
國士館

麻布笄町一八二番地
電話芝四六九番
五四七六番

國士館設立趣旨（大正六年「一九一七年」） 現代的表現文

今日は、物質文明の弊害が日増しに甚だしくなりつつある。世間では「科学智」すなわち、自然科学及び人文科学の知識を重視して、徳性の涵養をなおざりにしている。そして、教育と称して、ただ「科学智の売買」すなわち、授業科目を設定して学問を教授・伝達しているに過ぎない。これでは、物質文明に終始するだけである。精神文明がなければ、如何にして国家の安全を実現させることができるか。精神文明は、物質文明を統一し、かつ指導するものである。たとえば精巧なおかつ様々な種類の武器を如何に多く保持していても、また、兵士が奮い立っても、武器の使用法を誤れば戦場において、何の効果も發揮できないであろう。そこで我々は、精神文明と精神教育とを主張して国家の基礎となるべき真の知識を養いたいと考えた。

一国の最高学府としての大学は、いまだ一般に公開されていない。公開されているとしても、ノートを読み上げるだけの講義で、いわば「死んだ学問」ともいふべきで、その説くところは高速で奥深い學術技芸であっても、形式的なものであり、また事の範疇を問うだけで、そこには何ら情熱なく、信念なく、人を感化するほどの力はない。形式、規則、規律、試験等が、いま教育と言われるものの実態なのである。

そこで我々は、形式にこだわることなく、学識の高い教師が膝を交えて親しく「生きた学問」を講究する道場を開設したいと考えた。大原則を厳守しつつささいなことには鷹揚に、真に師弟の情をもってこれを維持していく。来る者は拒まず、去る者は追わず。何ものにも束縛されることなく、ただ礼節を重んずるのみである。

すなわち、この道場は「大自在力」すなわち悟りを開いた人間をもつ力を育成する契機になることを期待している。狭く足を踏み入れるくらい小さな寺子屋ではあるが、大正維新の松蔭塾としての効果があるものと思う。一を知ってすべてを知る。我が道場の目標は「心の学」であり、「活きた学」である。信念をお互いに感じ合うことである。理を説いて理に墮することなく、術を語って術に溺れることなく、あらゆる言説を取捨選択して、狭い教室からではあるが、全世界に影響を与えようとするものである。

國士館再建趣意書

國士館の再建に当り同憂の各位に懇へたい。

國士館の創建以來茲に三十有五年。敗戦後の外国占領下、当局の勧告により一時「至徳学園」と改称したが、建学の趣旨は渝るところなく、占領の終了と共に再び國士館の旧称に復ることになった。けだし、國士とは、威武も屈する能はず、貧賤も移す能はざる本当の人間であつて、これを描いて教学育人の目標はあり得ないからである。

然らば、本当の人間とは何であるか。今の世においては何等特別の徳操ではない。常識である。平衡を得た人格である。狂人が走つても共に駆け出さない平常心の持主である。事は極めて平凡の様であるが、如何なる威武の下にも、如何なる誘惑の前にも能く平常心を失はず、判断を誤らないことは容易の如くにして決して容易でない。而してそれを能くすると否とは、殆ど繫つて常識を具足するか否かにあるのである。

イギリスに空前の総罷業が行はれ、そしてそれが腰砕けに終つた時、ボルドウィン首相は「これは英國民の常識の勝利だ」と叫んだ。正にそれは政府権力の勝利でなく、國民常識の勝利だったのである。例をイギリスに求めるまでもない。古來國を危くするものは平衡の喪はれた心であり、國の根幹が常識によつて固められるならば、動乱の中に立つても國は危くない。國士館の養成せんとするものは、この常識であり、如何なる誘惑の前にも平常心を喪はない人格である。

今日の教育について種々の批判を聞くなかに、最も大なる缺陷は、その教育の方針が國の常識と懸け離れて居ることである。學問の自由を叫ぶうちに教育の目的を忘れたところにある。役に立つ人を作る代りに役に立たない人を作りつゝあることである。國士館は深く日本の將來を考へ、國の常識に基いて役に立つ人間を作りたい、それが念願である。

國士館は創業三十五年、大方諸賢の庇護と叱正とによつて自ら特異の傳統を培ひ來つた武道教育はその一であり、國士館の名は武道界において一の存在になつてゐる。この武道教育は國士館の再出發と共にますますその特長を生かして行きたい。けだし、文武は鳥の兩翼、車の兩輪、文なき武の想像されざる如く、武なき文をもつては徳性の完成を期し得ないからである。

若しそれ學風の揚ると否とは、學校当事者の發憤精進と共に、同憂諸賢の垂教に俟つところが甚だ多い。切に大方の御支援を仰ぐ。

新日本紀元元年五月一日

出光工業社長

ブリッジストンタイヤ社長

衆議院議員

衆議院議員

元司法大臣

日本トレーディング社長

東邦生命社長

貝島鋳業社長

元王子製紙社長

室町海運社長

東洋レーヨン社長

興亜海運火災社長

大日本水産会長

元独逸大使

参議院議員

三井鋳山社長

参議院議員

元鉄道大臣

明治鋳業会長

住友鋳業社長

出光佐三

石橋正二郎

鳩山一郎

緒方丈虎

小原直

太田茂実

太田清藏

貝島太市

高嶋菊次郎

高嶋基江

田代茂樹

中野金次郎

鍋島態道

武者小路公共

野田俊作

山川良一

松野鶴平

松本健次郎

福永年久

大	信	元	元	東	参	国
成	越	大	外	都	議	士
建	化	藏	務	冷	院	館
設	学	大	大	藏	議	
社	社	臣	臣	社	員	長
長	長			長		
藤	小	有	澁	眞	廣	柴
田	坂	田	澤	藤	川	田
武	順	八	敬	愼	弘	德
雄	造	郎	三	太	禪	次
				郎	郎	郎

(イロハ順)

國士館再建趣意書（昭和二七年「一九五二年」五月一日）現代的表現文

國士館の再建に当たり同憂各位に訴える。

國士館創設三五年、敗戦後の外国占領下で当局の勧告により、一時「至徳学園」と改称したが、建学の趣旨は変わることなく占領の終了とともに再び國士館の名称を戻ることになった。思うに國士とは武力に屈することなく、どんなに貧しても志を変えることのない本当の人間のことであり、これを描いただけでは「教育育人」の目標とはなりえない。

それでは本当の人間とは何か。今の世では何ら特別のことではない。常識である。平衡を得た人格である。狂人が走ってもそれと一緒に走り出さない平常心の持ち主である。非常に平凡のようであるが、如何なる威武にあっても、如何なる誘惑があっても平常心を失わず、判断を誤らないことは決して容易なことではない。したがって、これが可能になるかならないかは常識を持っているかどうかによるのである。

イギリスでは、空前のゼネストがあつた。だが、それは腰砕けに終わった。この時、ボルドウィン首相は「これはイギリス国民の常識の勝利だ」と言った。それは政府の勝利ではなく、まさに国民常識の勝利だったのである。例をイギリスに求めるまでもない。古来、国を危くするものは平衡の失われた心であり、国の根幹が常識によつて固められるならば、動乱の中に立つても国は危うくない。國士館の養成しようとするのは、この常識であり、如何なる誘惑の前にも平常心を失わない人格である。

今日の教育について種々の批判がある。最も大きな欠陥は、教育の方針が国の常識とかけ離れていることである。学問の自由を叫んで教育の目的を忘れたところにある。役に立つ人を作る代わりに役に立たない人を作りつつあることである。國士館は深く日本の将来を考え、国の常識に基づいて役に立つ人間を作りたい、それが念願である。

國士館は創業三五年、大方の諸賢の庇護と叱正によつて特異の伝統を培ってきた武道教育はその一つであり、國士館の名は武道界において一つの存在になっている。この武道教育は國士館の再出発とともに、ますますその特長を生かして行きたい。思うに、文武は鳥の両翼、車の両輪、文なき武の想像できないように、武なき文では、徳性の完成を期待できない。

この学風を高めるかどうかは、学校当事者の努力及び精進とともに、同憂の皆さんのご指導によるところが非常に多い。皆様のご支援を仰ぎます。

理事長

西原春夫語録

。理事長就任講演

。ホームカミング・デイ

。国士館のビジョン

。青少年教育を語る



●私がめざす二つのキーワード

私は、この三月半ばまで、早稲田大学のヨーロッパセンターという研究機関の館長として、約三年間ドイツのボンにいました。そしてとりわけ、統合という歴史的な大事業に取り組んでいるドイツ、あるいはヨーロッパの姿を直接見てまいりました。また、それだけでなく、そういう世界史的な潮流の中で非常に苦心し、努力をしているヨーロッパの目から、わが祖国である日本とか、あるいは日本が属しているアジアというようなものを、じっと眺めてまいりました。そして、帰国後何をするのが私にとって使命なのか、古い言葉で言いますと、お天とうさまのお指図は何かというようなことを、ずっと考えてまいりました。

そのことについて、少し時間を拝借してお話をさせていただきたいと存じます。大きく言いますと、二つのキーワードにまとめられます。その一つは、道徳教育といいますか、本学では徳育という言葉を使っておりますが、そういう道徳教育、あるいは人間教育の理論体系をつくり、それを普及させる仕事、それが第一です。

もう一つは、先ほどもちょっと触れましたけれども、われわれの祖国は日本ですから、日本の発展向上、日本人の幸せのために

いろいろなことを考えなければいけません、歴史の流れを見ておきますと、ただ日本というだけではなく、とりわけアジアの中における日本、アジア人としての日本人という意識、認識を普及させる必要があるのではないか。これが第二でございます。

●ヨーロッパから見た日本とアジア

私のドイツ滞在中、まさにこの三年の間に、いろいろな出来事が日本に起こってまいりました。その中でも、遠くから日本のニュースを聞きながら本当に身の毛のよだつような思いをしたのは、昨年の神戸の中学生の殺人事件でありました。そして今年に入りましてから、学校の先生をナイフで刺し殺す、警察官のピストルを奪うためにけがをさせる、バタフライナイフを用いて仲間を刺す、そういう中学生の暴力事件が頻発いたしました。いまの中学生が全部、そういう非行少年であるとはとても思えませんし、大部分の中学生はすばらしい能力を持ち、そしていい子として育っていると思います。しかし、いま挙げたような出来事は、ひょっとすると日本の学校教育始まって以来の不祥事ではないでしょうか。

子供の行動はまさに社会の鏡でありますから、われわれ大人がつくった社会が、そういう子供の行動を生み出したと考えなければならぬ。われわれ大人がつくった現在の教育体制は、これではたしていいのだろうか。日本の教育力は低下したのではないか。そういう思いを、遠くドイツの空から抱いたのでございます。

援助交際というような言葉は、以前にはございませんでした。女子高校生が援助交際でお小遣いを稼いでいる。それに対して大人は恐らく「だめ、やめろ」と言うでしょうが、なぜいけないかという理論体系を、はたしていまの大人たちは持っているのでしょうか。女子高校生は言うんです。「相手のおじさんは喜んでいいるのよ、私もお小遣いもらって喜んでいいるのよ、何も減らないじゃないの、誰も損しないじゃないの、どうしていけないの」。こういう女子高校生の反論に対して、大人は、「こうこう、こういう理由でだめなんだ」という理論を持っていないところに、現在の大きな問題があると感じた次第でございます。

これは、戦後日本のオピニオンリーダーたちが、戦前への反省も込めて、憲法の保障する基本的人権のみを大いに強調した。それはぜひ必要なことであったが、実は憲法の体系から、援助交際は「だめだ」と言えるだけの理論体系は出てこない。これは何人

かの憲法学者に聞いても、そういうお答えでありました。しかるに、憲法の基本的人権を強調するのと並行して、本来は法律のお世話にならないで社会秩序を維持し、個人の利益を守っていく倫理体系を、構築していかなければならなかったにもかかわらず、それをやってこなかった。少なくとも十分にやってこなかったところに、現在の大きな問題がある。こう私は考えたのであります。戦後五十年たって、一般の国民もやっとそのことに気づいた。いまこそ、そういう倫理体系の理論化をすべきなのだと思います。でございます。

やや迂遠^{うえん}ですが、それでは倫理体系、道徳教育の理論体系の中身をどういうふうに考えるか。これにはいろいろなアプローチがあると思います。先生方の中にも、もうそれぞれのお考えをはっきりとお持ちの方もいらっしゃると思います。

一つには、日本古来の道徳原理を中心に考えていく。たとえば恥の文化であるとか、本学が大変重んじている武道精神であるとか、武士道であるとか、そういう戦後いささか軽視されてきた日本古来の文化、それに基づく倫理体系を中心に考えていくべきだという考え方は当然あり得るし、またそれ自体を否定するつもりは全くありません。しかし、ヨーロッパに三年いた間に、私はややそれとは角度のちがうことを考えてきました。昨年の暮れから、アジアで金融危機が起こりました。そのアジアの金融危機について、あるドイツの雑誌が、数ページの評論を発表し、その中にこういう言葉が用いられていました。「このアジア金融恐慌は、ソ連の崩壊、社会主義の崩壊に続く西側資本主義の勝利の証である」。この言葉に、私は愕然^{がくぜん}といたしました。恐らくヨーロッパの私たちは、ヨーロッパの資本主義にはキリスト教倫理による裏打ちがあり、キリスト教倫理によってヨーロッパの資本主義はコントロールされつつ発展したんだという信念・確信を持っています。確かにマックス・ウェーバーが、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という本を書いているように、自由主義経済、市場経済、自由な経済活動をやるにしても、ヨーロッパ人には、誰も人が見ていなくても神様をご覧になっているんだ、だから悪いことはできないんだという意識があります。すべてのヨーロッパ人がそうだととも思えませんが、確かにそういう側面がある。「人は見ていなくても、神様をご覧になっているんだから悪いことはできない」。「賄賂^{わいろ}なんか取れない」という意識は確かにある。しかしながらそのヨーロッパの資本主義は、いろいろな不都合なことも起こしてきたと私は思っております。けれども、「全体としてあまりひどいことにならずに今日に至った」と言えるかもしれません。そういうヨーロッパ人から見ると、アジアで最近資本主義が「ワースト」と燃え上がった。アジアの製品がヨーロッパの

市場へ「ワッ」と押し寄せ、ヨーロッパの製品が駆逐されるようになった。その被害意識もあって、ヨーロッパ人は恐らく心の中で、「アジアの資本主義にはヨーロッパのキリスト教倫理のような裏打ちはあるんだろうか。」「何がアジアの資本主義の倫理的基礎なんだ。」「ないんじゃないか」。ひどい言葉で言うと、「結局アジア人はただ金儲けのためにやっているだけじゃないか」という意識が、恐らく人には言わなくてもあったのだろうと思います。そういうヨーロッパ人の意識が、先ほど申し上げたような雑誌の言葉となってあらわれたのではないかという気がしてなりません。

それでは一体、アジアに資本主義をコントロールする倫理がないかという点、これは皆さんどのようにお考えでしょうか。私はないとは思いません。しかし、確かにキリスト教倫理のように、はっきりしたものがないし、またその機能が、とりわけ最近大変弱まっていることは否定できません。アジアで金融危機が起こる前までは、「二十一世紀はアジアの時代だ」という言葉が、それこそ世界中の人の口にのぼるようになりました。最近はややその言葉は下火になって、「やっぱりアジアの時代は来ない」とおっしゃる方もいますが、私は現下のアジアの金融危機にもかかわらず、二十一世紀はやはりアジアの時代だということを確信いたしております。

そうであればこそ、まさにこの二十一世紀を目前にしたいま、ヨーロッパの資本主義を裏打ちしてきたキリスト教倫理に優るとも劣らぬアジアの倫理を、やり方は大変難しいけれども、各国ともにだんだんと明らかにしていくべきではないでしょうか。特に中国は、改革開放政策をとって十数年たって大いに発展したけれども、他方において公務員の汚職をはじめ、いろいろな不祥事が起こって、それに中国政府も悩んでいる。儒教が強いと言われるあの韓国でも、別な形で公務員、たとえば大統領というような高官と財界との癒着が明らかになってきた。日本でも、いままで聖域と考えられてきた大蔵省にさえ、検察の刃が向けられるようになってきた。いまこそ、そういう問題に悩んでいるアジア各国と協力しながら、協同しながら、そういうものを明らかにしていく時期に来たと考えております。

●アジア人としての日本人

あとでまたちょっと述べますけれども、アジアという地域の範囲ははっきりしたものではありません。一番広い概念は、アジア大会が中近東まで含むものを考えておりますし、もうちょっと狭くして、インドはアジアに入るのか、入らないのが問題となります。東南アジアはインドを入れていない。東南アジアとその北側にある北東アジア、この辺が最も狭い意味におけるアジアということになるのかなど、アジアをどういうふうに考えるか。これは結局判断をする人あるいは組織の思想のあらわれだと思います。したがって、国士舘がどういうアジア概念をとるか、これは国士舘の思想をあらわすものだと思います。私個人は、実を言いますと、早稲田の総長時代から、東南アジア、あるいはアジア太平洋というものを決して否定したり排斥したりはしませんが、当面の目標を北東アジア、つまり日・中・韓・台に置こうということで政策を進めてまいりました。また私の学術面の国際活動も、日・中・韓・台に焦点を当ててまいりました。それがなぜかということとは、あとでまた少し触れたいと思いますが、要するに中国の古代文明の影響を受け、それを成長の糧として発展してきた、そして同じモンゴリアンに属する日・中・韓・台あたりをアジアの窓口と考えるのが一つの行き方ではないかと考えたからであります。前述のアジアの倫理ということを探する場合にも、恐らくは中国で発展した儒教、道教、あるいは禅宗のような仏教、そういうものが基礎になるとするならば、当面、東北アジアに焦点を置きつつ、その体系構築をやるのが適当ではないか。こう考えているのであります。

しかし、そうはいうものの、アジアといっても共通性もあれば個性もあります。それぞれの国によって事情も違います。したがって、それぞれのアジアがアジア共通の倫理を探しつつ、それぞれの国に固有な倫理体系をつくっていく。たとえば、自分の国にとっては、そのアジア固有の倫理体系のうち何が採れるのか、何が採れないのかを検討し、採るものは採り、棄てるものは棄て、そういう過程の中で、今度はそれぞれの国固有の倫理観がある。ひょっとすると先ほども挙げた恥の文化であるとか、あるいは武士道精神というようなものの根は、たとえば中国のようなアジア全体にあるかもしれないけれども、やはり日本という特殊な地理的状况、歴史的状況の中で育ったものであり、そういう日本固有の文化、それに基礎を置く道徳原理を、そこにうまく接木させていくことによって、それぞれの国の倫理体系が生まれてくるのではないでしょうか。私も教育に携わる者からするならば、親や

先生方が依拠し得るような倫理教育体系、道德教育体系を、そういうアプローチでもって築いていくのが適當ではないであろうか。こう考えているところでございます。

こういうことは本来国がやるべきだ、というご意見もあろうかと思ひます。私はひと頃はそう考えました。これは本来中教審がちゃんとやるべきだと考えた時期がございました。しかし、最近では、いまの日本の思想状況を前提にすると、国ではとてもできないのではないかと思うようになりました。しかし、誰かがやらなければならないとするならば、これはむしろ民間の活動としてやっていかなければならないのではないか。それをやるのに、私がふさわしいかどうかはわかりませんが、そう努力をしてみようと考えて、帰国後の準備をし、計画を立てつつあったところに、本学の理事長のお話があったという次第でございます。

◎時代は国士館教育を要望している

ここまでお話をしますと、恐らく皆様は、なぜ私が国士館の理事長という大任をお引き受けする決意をしたか、ご想像がつくのではないかと思います。国士館は、私の所属しておりました早稲田大学と関係の深い大学でありまして、創立者の柴田徳次郎先生が、法学部の研究室の中村宗雄先生を訪問されるお姿を、若い頃何度も見えておりました。また、私の敬愛する多くの友人が、本学で勤務いたしております。そういうことから、国士館についてある程度の予備知識はございましたが、改めて国士館の歴史をひもといて、まずもって大正六年、柴田徳次郎先生によって設立された、この国士館の設立趣旨を読んで驚嘆いたしました。そこには、八十年たった今日にも、寸分違わずあてはまる言葉が書かれているではありませんか。「物質文明の弊、日に甚だしく、人は唯科学智を重んじて、徳性の涵養を忘る。今日に於て、教育とは唯科学智の売買たるのみ。此の如きは、唯物質文明に終る。精神文明なくして、国家豈に一日の安きを得んや。蓋し精神文明は、物質文明を統一指導するものなり。(中略) 吾人は精神文明と精神教育とを此際に唱道して、国家の柱石たる真智識を養成せん事を期す。」これは本当に私自身もそういうふうと考えております。この現代社会の中で考えていたことが、何と八十年も前に、柴田先生の言葉によって明確に示されている。これは私にとって大変な驚きであるとともに、理事長をお引き受けすることを決心する、最後の引き金となりました。

また、大正八年、高等部、中等部の開設に際して制定された、皆様もご承知の、「読書、体験、反省」という三代綱領と、「誠意、勤勞、見識、気魄」という四条目は、今日に至るまで絶えることなく、国士館教育の根幹をなしてきたと想像いたしておりますが、まさにこれこそ、今日の日本の教育全体に最も欠けているところではないかと考えた次第でございます。

昨今、社会を驚かせている中学生の非行は、いろいろな原因があると思いますが、恐らくは子供時代に、苦しいけれどもやり遂げなければいけないことを、辛抱強くやり遂げるという体験もなく、そして一見悪いことのように見えるが、実は子供の精神的な成長過程にとって非常に必要な、仲間同士のけんかもせず、頭でっかちに育てられた若者特有の現象だと思われます。本学の中学・高校では、柔道・剣道が必修になっている。実は一昨日、牧校長にお会いして、そのことを確認してまいりましたが、柔道か剣道が必修になっているというところでございます。

礼に始まり、礼に終わる武道。しかも必殺の技術を身につけながら、刀を抜かないことを教える武道。偏差値の高低などまったく区別なしに体をおつけ合う武道。これを必修にする本学の教育方針。これはひょっとすると中学生の非行防止に悩み、学級の崩壊、教育の崩壊に悩んでいらっしゃる、非常に多くの学校関係者に対して、一つの解決策を示している大変な見識ではないか。このように私は改めて思ったのでございます。

さらに、「アジアの中における日本」という観点は、本学が創立当初から持った思想であります。もっとも戦前の大東亜共栄圏という思想は、今日の目から見ますと、少なくとも私の観点から見ますと、二つの問題点をはらんでいたと思います。その第一は、武力を背景にしていたこと。第二は、日本を盟主とするという形容詞がついていたことです。この二つは、今日のアジアの状況を前提にする限り、到底容認し得ないであろうと思います。しかし、アジアが共に栄えなければいけない、共に栄えようという考えは、今日でも決して間違っていないどころか、非常に必要なことなのです。しかも、以前とは違った意味で、現実味を帯びるようになった考え方だと思っております。

私は三年間ドイツにおりまして、先ほど申したように、ヨーロッパ統合のプロセスをじっと眺めてまいりました。その結果得た結論は、ヨーロッパの統合は単にヨーロッパだけの現象ではなく、世界史の流れの先駆的なあらわれだということでありました。そういう世界的な潮流に乗っているからこそ、イギリスとフランスだとか、ドイツとフランスだとか、何百年も戦争を繰り返し

てきた国が、通貨を同じにしてまで、EUという一つの傘の下に入ろうとしています。いろいろな動機、原因はありますが、やはりそこに大きな世界史の流れが働いていると、私は感じるのでございます。

国連を中心とする世界連邦の建設。これは人類にとっては夢であり、理想であると思います。二十一世紀の後半になると、そういうことが現実的になってくるかも知れません。しかし、人類はその一歩手前で、国家の垣根を低くしながら、国境の垣根を低くしながら、一定の共通分母を持った地域ごとに、その地域連合を造っていく。そしてその地域連合の中で生じた問題は、国連のお世話にならずに、その地域の中だけで解決していく。そしてその地域の国々が、人々が共に栄えるという歩みをする世界史の流れを、ヨーロッパ統合は一番先に実現しようとしているのだと私は考えております。

そうだとしますと、われわれが所属するのは、疑いもなくアジアであります。それは否定できない事実であります。確かにアジアでは、まだヨーロッパのような、統合を実現する条件は整っておりません。政治的な不安定がある。国がまだ二つに分かれているところさえある。経済的な格差が大きい。国と国との経済的格差も大きい上に、一つの国の中で貧富の差はあまりにも大きすぎる。そういう問題があります。

しかし、私も十年先、二十年先を見る必要があります。もっとも、十年先、二十年先がどうなるか、これは必ずしも正確に予測することはできません。しかし、もし仮に南北の朝鮮半島の問題が何らかの形で解決をし、中国が政治と経済の間の大きな矛盾をうまく処理しながら政治的、経済的に発展し、安定していった段階では、つまり二十一世紀の十年頃、二十年頃には、何らかの形で共同体を造ろうとする動きが出てくるでしょう。「国境で品物に税をかけるのはもうやめよう」というような話になってくると考えられます。

アメリカは、アジアだけが団結するのを大変恐れております。そのアメリカもさすがに「おれもアジアだ」とは言えませんが、自分を含めるために、「アジア太平洋」という概念をつくり出しました。それがいま一つのキャッチフレーズになっています。日本人もまた、流行のように「アジア太平洋の時代だ」というふうに言っています。北東アジア、東南アジアだけではなくて、南太平洋の島々、そこには非常に違った習俗があります。オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ、カナダあたりは、ある程度関係の

深い国でもあり、日本は理解しやすいけれども、南米諸国、これがまたそれぞれ歴史的にも地理的にも大変違う。そういう南アメリカの諸国をも含んだ共同体などができるわけではない。極端な言い方をしますと、アジア太平洋という概念は、政治的な概念であるといわざるをえません。

しかし、確かにアジア太平洋という概念。これは日米関係も含めて、日本がそう簡単に捨て去るわけにはいかない関係であることは、私もよく知っております。したがって、アジア太平洋というものを敵視したり、排除したりするのはよくない。しかし、日本人はアジア人なんだ、日本はアジアの一国なんだということは疑いのないところですから、国としては言えないかもしれないけれども、民間人はそれを言ってもいいのではなからうか。それは歴史予測を前提にした一つの思想のあらわれになるであろうと、私個人は考えております。そういう歴史観に基づく、北東アジアの重視という考え方。これと先ほど申し上げたような道德教育原理の確立普及ということを合体させた運動をやりたいと思っているのが、私の最近の心境でございます。

●国士館の向上発展のために

私は、この私自身の考えを国士館に押しつけようとは、決して思っておりません。しかし、私の考えの中で、国士館の建学の精神とも一致し、少なくとも建学の精神の二十一世紀版と一致し、また日本全体に対して国士館の個性、特色を強調するのに役立つ部分があるとするならば、これを大いに活用していただきたいと思ひます。私の申したいことは、まだまだ説明が尽きていませんが、私の考えのうちでどの部分がそれに当たるのかを、国士館の教職員の皆様の間で議論をしていただきたい。そして、その議論の帰趨^{きすう}を何らかの仕方でも私にもわかるようにしていただければと思っております。

もし仮に、全体ではないにしても、ご賛同いただける部分があるとするならば、今後私は、国士館理事長の名において、世のいろいろな活動をするようになると思います。

もっとも、場合によっては、私は自分という人間を使い分けなければならないかもしれない。つまり「国士館共通の意見だ」と言える部分を述べる場合には、私は国士館理事長ということを表に出して活動しよう。しかし、必ずしもそうでなくとも、私が個人

として活動したいと思う部分があるだろう。その場合には、青少年育成国民会議会長といった別の資格でもってやることになるかもわかりません。私の知りたいのは、いまのような考え方が、国士館の大方の了承が得られるのかどうかということです。また、皆様から私に対して、いろいろな修正意見を述べていただければ、私自身の考え方も全部が完成したとは思っておりますので、皆様のご意見を参考にしながら、直していきたいと思っております。

教職員の皆さん、どうかよく聞いていただきたいと思います。国士館は、日本全体の進路を率先垂範^{そつせんすいはん}指し示すに足る潜在能力と適性を持っていると、私は思っております。教職員の皆さんがそのような使命感を持って精進努力するならば、国士館は必ず早晚、それを実現することのできる学園だと、私は確信しております。私も縁あって本学の理事長を仰せつかった以上は、国士館の向上発展のために全力を傾ける所存でございますが、単にそれだけではなく、国士館の向上発展を通して、いま重大な危機に見舞われている日本の教育の改革に少しでも寄与したい。このような心意気できるとご理解いただきたいと思います。

もちろん、いま本学が体育学部の新しい学科問題、大学院の拡充問題、臨定後対策等々、緊急の懸案をたくさん抱えていることも、私は十分承知しております。しかし、それらの問題はいずれも、いろいろ複雑な経緯のもとに出てきたものであると思われる。すし、その経緯をよく知らなければ、大方の納得のいく解決はできないであろうと思っております。また、この問題に対するさまざまなご意見を伺った上で、決断をしなければならないことであります。そういう種類の問題であることは、皆様もご承認いただけると思います。そういう意味で、私に少し勉強の時間をお与えいただきたい。その上で、それらの課題の解決は、理事長の責任において、できるだけ早い時期に誠実に実行することをお約束いたします。

長時間、大風呂敷を広げましたが、ご清聴いただきまして心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

(平成十年四月一日 理事長就任講演)



●国士館の歴史的拝啓

本学の歴史を非常に大きく分類しますと、大正六年に設立され、昭和三十三年に大学になった。そして昭和四十八年に創立者柴田徳次郎先生が亡くなられ、そのあと梵天先生が理事長を引き継がれ、昭和五十九年に去られた。その間にもいろんな時代変遷があったのですが、ある意味で言うところ、国士館が柴田家といえますか、柴田父子によって導かれた時代、というのがあった。大づかみにすると、これが国士館の第一期だと言えらると思います。

この第一期と五十九年以降の第二期とは、はっきり区別されると思います。これは、ここで縷々説明する必要はないと思いますが、いずれにせよ、柴田家から独立して、民主的な大学運営をするようになってくるわけです。具体的には、綿引先生、清水先生、松島先生によって、歴代引き継がれた時代が今日までに至った。これを第二期と言えらると思うんです。

その間、本当に当時の先生方、教員も職員も大変な苦勞をされたところ、私は想像しております。特に初め頃には内外からのいろいろな圧力もあっただろうし、大変なことだったと思います。それからまた、いままで経験していない、いろいろなルール・習慣をつくる。そうすると、どういうのがいいのか、いろいろ意見が分かれて、以前の方式がいいとおっしゃる方もいれば、いやだめだと言う方もあり、大変な苦勞があったろうと私は推察いたしておりますが、とにかく私が着任して感じたことは、外から予想していたよりも、現在の国士館は、管理運営体制も、財政も、それからまたソフトもハードも、入学定員が少ないところだけはちょっと問題がありますが、予想よりはるかにしっかりしていた、というのが私の印象なんです。

私自身も、早稲田大学については、外から中からよく知っていますし、また大学設置・学校法人審議会や大学基準協会の委員とか会長もやっておりましたので、いろいろな学校法人のことも、経理も含めてよく知っておりますが、そういう観点で見て、いまのような印象だったのです。それを実現してきたのは、本当に皆さんのご苦勞があったからだと、敬服しております。

しかし、これから先の理事長は、先ほど申したような激烈な戦争に勝ち抜くという役割を背負うことになる。これまでの十五年間、第二期に入った、三先生によって導かれた国士館というのは、どちらかというと学内の体制をきちんとするということで、その目的を達成されたと思うんです。恐らく、そういうふう言うことができる。今後それを続けなければいけないんです。これ

は私どもの理事会の任務であって、それも続けなければいけないが、これからはそれだけではなく、外の社会の中で激烈な戦争に勝ち抜いていくことをやっていかなければならない任務を背負ったんだというふうに考えるのであります。

しかし本当は、学内にも大変優れた方がいっぱいいらっしゃいますので、学内からお出になるのが本当は筋だったような気がするんです。問題は、優れた方がたくさんいらっしゃるのに、何で外の私を呼ぶことになったのか。こう考えてみますと、これは中の方の能力の問題ではなく、やっぱりこれが国士館の一つの宿命見たいなところがあったのかなと思ったんです。

それはどういうことかといいますと、激烈な競争に勝ち抜いていくためには、何としても国士館の個性、特色、これを發揮する。しかも、これが社会的な要求、できれば、日本の進路、日本はこういうふうに進むはずだという日本の進路に合い、そして社会的必要性があり、それが同時に国士館の伝統や個性をあらわす、そういう大学づくりをやっていかなければ勝ち抜いていけないのです。理論的に言えばそうなんです。

そうしますと、当然、大学の個性とは何だ、ということになってきます。私立大学の個性とえば、誰でもが、私立大学の建学の精神、私立大学には創立者があり、その創立者の建学の精神によってその大学がつけられた。その建学の精神を大いに發揮すればいいんだということになるんです。国士館も当然そういうふうを考えるのが順序です。

ところが、国士館の場合には、一元的にそう言えない側面があるところの問題があると思うのです。早稲田大学の場合には、わりとスツと行くのです。何としても明治十五年に大隈さんがつけられた大学ですから、大隈さんの建学の精神を思い起こして、そのいわば二十世紀版を考えればいい。私も総長時代に、ときどき大隈さんのご威光を活用しましてね。つまり、一西原が言ったんだったら誰も信用しない。早稲田にとって神様は大隈さんなんですから、ときどき、「こうこうこういうことが必要であると私は思うが、これは私個人の見解ではない。もし大隈さんがご在世ならば、こういう理由で必ずこうおっしゃったであろう」と言うのと、もう大隈さんになう人は誰もいないのですから、合意が得られる。国士館でその論法を使う勇氣はまだございませんが、やはり建学の精神、創立者の精神にかなうものはないのです。

しかし、国士館の場合、創立者が非常に個性あふれた、非常に独特な思想の持ち主であったばかりでなく、当時の日本やアジアの状況に強く依拠した考え方を打ち出された。しかも、その時代が非常に変わってきた。したがって、創立者の言葉そのものを全

部取り入れて、これを実現すればいいというふうに、なかなかいかないう側面がある。これを私は、国士館の「ためらい」の原因だと考えているのです。現に、学内外に、「これをはっきりせよ」とおっしゃる方もいらっしゃるが、これはできるだけ避けたというご意見の方も現にいらっしゃるんです。その両方とも私には非常によくわかる。けれども、それが両極にあるところに、国士館のためらいがあると思います。

内部の方々、特に卒業生の方々は、その辺のことを全部ご承知ですから、なかなか動きがとれない面があるんじゃないか。しかし、この激烈な競争時代にリーダーシップを発揮して、国士館はこういう方向に行くべきだ、ということをリーダーに言ってもらわなければ競争に勝てない。独裁者はいけないが、私立大学の中で民主的な手続きを重んじながらリーダーシップを発揮したことのある人にそれをやってもらおう、ということになったのではないか。これが私の就任した歴史的意義なんだろう。これは、内部の方に能力がないとか、そういう問題ではなくて、国士館の宿命だったんだという気がしてならないのです。

そこで私は、いまの点からすれば、私に課せられた本質的な一番重大な任務は何かを考えた。一番先にやらなければいけない重大なことというのは、具体的なことは除きます。たとえば大学院の博士課程の設置、ずっと懸案だったわけです。体育学部の新学期の設置。これはもう大変な大議論があって決着がつかなかった問題です。そういうことを何とかやり上げていかなければならぬという具体的な施策の問題を除いて、まず第一に私がやらなければいけないことは、まさに国士館の個性と特色をはっきりさせて、それに基づいて進むべき方向をはっきりさせるということではないだろうか。しかも、教職員の皆さんが渋々、「理事長が言うからまあ行こう」というのではなくて、皆さんが誇りを持って「そうだ！」と考えて、そしてその方向へ進んでいくということであれば、激烈な競争に勝ち抜くことはできないんだ。それが私のまず第一の任務ではないだろうか。こう考えたのであります。

●建学の精神の必要性

そこで問題になるのが、国士館の個性、特色と言え、何としても「建学の精神」です。現に私は、着任以来、いろいろなところで「建学の精神」ということを申してきました。それに対して、「あんまりはっきり言わないほうがいいよ」と言う方もいらっしゃる

いますが、私はそれをはっきりさせてきたんです。

これは、皆さんも一度よく考えていただきたいのですが、建学の精神というのは、その理解が非常に難しいのです。皆さん誰もがおっしゃるんです。建学の精神は私学の命だと。建学の精神を堅持して、そしてその建学の精神のいわば二十一世紀版を考えれば、行くべき方向がわかる、ということをおっしゃるんです。しかしこれは実に難しいんです。

第一に、何を建学の精神と言うかです。一般的にいつて、創立者のいろいろな言葉が、建学の精神をあらわしていると思うんです。ところが、早稲田の創立者、大隈さんは、文書を残していないんです。本当に残していない。大隈重信という自分の署名すら一つしかないんです。内閣総理大臣、外務大臣、全部花押だけで済んでいるんです。それは、小さいときに悪筆だったらしいんです。字が下手くそでね。小さいときに、おまえは何と下手なんだと侮辱されて、「じゃあ、おれは一生字を書かん」言っただけで、それを頑固に貫いたんだといわれていますが、本当に文書が残っていないんです。

もちろん、大隈さんは大いにしゃべりましたから、それを講演録みたいなのはたくさん残っています。ところが、なかなかわからないんです。いろんなことを言っていますから。どれが建学の精神なんだか、その理解というのは大変なことなんです。

その意味では、国士館の場合だって、創立者は大いにものを書かれ、またいろいろなところで演説を行っています。それがいろいろ残っていますから、このいろいろ言われている中でどれが建学の精神なんだと、理解するのは大変難しい。これがまず第一なんです。

第二に、建学の時代といまとは事情が違ってきています。社会は必ず変化するものです。つまり、建学の時代といまとの間には社会が変化している。学校というのはどうあるべきか、いろいろな考え方があって、純粋に時間を超えた学問をやれ、という考え方もあるが、その学問自体だって、やっぱり社会の変化を繁栄させていかなければならないことは言うまでもありません。しかもどういう人材を養成するかというと、その時代、時代に必要とされる人材を養成していかなければならないということになります。

そこで、建学の精神と社会の変化との間をどう考えるかという問題があるのです。この点について、これはあとで申しますが、建学の精神は変わっていいんだ、という考え方があっていいんです。あるいは建学の精神は変わるべきだ、という考え方もあります。

皆さんの中にも、あるいはそういうお考えの方がいらっしやると思います。一概にそう言っていないかどうかということがあります。さらには、建学の精神というのは、もうあんまり強調しなくてもいいじゃないかとおっしゃる方がいるんです。

ちょっと脱線ですが、先日、本学の評議員の清水司先生が主催しておられる、大学経営フォーラムというところで小さなシンポジウムがあり、そこでレポートをやってくれということで、十五分ぐらいのレポートをやりました。そこではい言ったように、この激烈な競争社会の中で勝ち抜いていくためには、その大学の個性を明らかにし、新しい意義のある教育機関をつくるか、あるいは既存のものを改革するか、そういう必要がある。その大学の個性を明らかにするためには、何としても建学の精神が大事であるということ、そういった計画を実現する手続きをどう考えるかということが問題だ、というお話をしたんです。それで質疑応答に移りましたら、桜美林大学を設置している桜美林学園という学校法人の理事長、清水畏三先生、これは私学の一方の旗頭の先生です。その清水理事長がパッと手を挙げられまして、いま西原先生はそういうふうに言われたが、日本は建学の精神というのを少し言いすぎるんじゃないか。大体、建学の精神というのはどうもはつきりしないんだし、時代によって変わらなければいけないものなんだから、そんなことをあんまり言うことないんじゃないか。たとえばアメリカの大学にしてもドイツの大学にしても、建学の精神なんていうことはあんまり言わない。その社会の必要に応じていけばいいんじゃないかと、こういうことを言われたんです。在籍していたほかの先生方も、それぞれ私学のリーダーですから、私がどう答えるかをかたずを呑んで聞いているのです。清水先生は、自分のところはそんなに建学の精神なんて、個性だ、特色だなんていうことは言わないんだ、とおっしゃるんです。

そこで、私はこう言ったんです。今年、高校野球で桜美林が東京の代表になって甲子園に出た。あのチームカラーと、十何年前に甲子園で優勝したチームカラーとは、選手は全く違うし、ひょっとしたら監督、コーチも変わっているだろうが、何と全く同じだった。ほかの高校のチームとはまるっきり違う、桜美林ならではのチームだった。結局、あれが桜美林の個性ではないか。もし桜美林が、そういうタイプというものを無視して、もっと力づくで相手をやっつけるといようなチームにしようと、ある監督がやったとしたら、それはうまくいかないはずだ。だから建学の精神というのは要るんだ、個性というのは要るんだと、こういうふうに申したんです。

そうしたら、清水先生、また手を挙げて、それは気がつかなかったが、あるいはそうかもしれない。だけど、それは建学の精神

とはあんまり関係がなく、いまの桜美林の教育の特色をあらわしているだけなんだとおっしゃるんです。

そこで、私はさらに、強いかわいさかといえ、うちの国士館のほうが強い。ところが桜美林というのは強くないのに勝っちゃうんです。どうして勝つか。相手がボロボロ失敗しちゃうんです。ミスするんです。それでいつの間にか勝っちゃう。つまり、一口で言うと、やさしいんです。力づくでギューツというんじゃなく、やさしいんだけど強い。これが桜美林なんだと。

それは結局、桜美林のキリスト教的な教育の成果が反映しているといわざるをえない。あそこはプロテスタントですが、プロテスタンティズムがそこにあらわれているんだと私は思う。これはやっぱり建学の精神の発露じゃないだろうかと言ったんです。

そうしたら、さすがの清水先生も、ああ、それは気がつかなかった。今度講演に来て下さいということで、私がどうも論争には勝つたらしいんです。そういうことがあったんです。

東京大学、京都大学。国立大学は創立者はいないんです。特定の人格はいない。いないけれどもタイプがあります。東京大学と京都大学のタイプの違いですね。それは、創立者がいなくても建学の精神はあるんだということになるんじゃないかと思うんです。

◎脈打つ建学の精神 「人を生かし、国を活かす」

まだほかにも、審議会で検討しているテーマはたくさんあるのですが、だんだんとこの国士館の計画、改革案をできるだけマスコミに流して、そして先ほど申したように、国士館は今生き生きと飛躍を遂げようとしているということを書いていただく必要があると考えておりまして、マスコミ側もだんだんと国士館に関心を持つようになりました。

ある教育雑誌の記者が取材にきたので、今のような大風呂敷を広げたところ、先生、これらに共通な国士館としての理念、理論、哲学はありますかという質問がありました。実は、そのとき急に答えられなかったもので、ある程度の答えしかできなかったのですが、その直後から、それは一体何だろう、あるはずだが何だろうと考えた結果、私はこういう言葉を見つけ出したんです。それは「人を生かし、国を活かす」という言葉です。これが共通の理念ではないかと考えた。

●人を生かす

お考えいただきたいと思いますが、例えば、救急救命の知識・技術を持ったスポーツ指導者の養成をやろうと国士舘は考えましたね。救急救命士がいなかったら救急車の中で死んでしまったかもしれないが、そこに救急救命士がいて、病院まで何とか死なせずに送り届けたために、生き長らえたという人が必ず出てくるだろう。

高齢者スポーツはますます普及させなければいけない。最近、NHKのテレビで、健康保険組合が崩壊し始めた、というニュースが出てまいりました。これは大変深刻な問題です。その理由は何か。六〇%が老人医療費の支払いだからです。これは今後もどんどんふえていくのです。日本の医療は人を長生きさせるということで大変な成功を収めたけれども、それだけでいいのか。それもあるんです。長生きをしてもらうというのは大変なことであるけれども、それだけでいいのかという大変厳しい問題を突きつけられているのが現在ではないだろうか。つまり、長生きしてもらうのには、それに加えて健康で長生きしていただくことがなければいけないのではないか。

きょうご列席の福岡の川越さん。名刺を拝見しますと、それを事業としてやっておられるんです。しかもさらに、「健康で美しく長生きするために」ということをくつつけた事業をやっておられて、私の上をいくんです。「美しい」が入っているんですから（笑い）。

健康で長生きをしていただくためには、いろいろな方法があるけれども、そこには、広い意味での中高年者のスポーツ指導というのが絶対に要るのです。そしてそこには救急救命の知識・技術を持った人材が必要です。それがなければ、急病を起こして死んでしまう。事故が起こって寝たきりになってしまう。そういう中で国士舘からそういう知識・技術を身につけた中高年スポーツ指導者を輩出することによって、その人がそういう事故を免れる。

これはどういうことかという、私は、人間にとって一番大事なものは命であり、先祖から与えられた能力を最大限に発揮するというのが人の生きがいなんだと思います。できれば、天下国家のためにその才能を生かし、多くの人に幸いをもたらすことができれば、それに越したことはない。それをすべきだけれども、それができない人の場合でも、持って生まれた能力を最大限に生か

すというのが人の生きる道なんだと考えております。

そういうふうに考えますと、事故から守ってあげたり、急病から守ってあげたり、これは「人を生かす」ということになるのではないのでしょうか。そういう人がいなければ、死んでしまうんですから。あるいは健康で長生きできなくなってしまうのですから、人を生かすということになるのではないのでしょうか。

スポーツ医科学科がそれに当たることは非常によくわかる。それでは武道学科はどうだろうか。実は、私の息子はひとりっ子でして、ちょうど息子が四六歳のときに私が外国に行って、一緒に連れていったということもあって、そのころやはり運動不足になってしまって、肥満児一步手前ぐらいになってしまったんです。

小学校に入ったときも、肥満児ではないけれども、その一步手前で、背は高いけれども、ぼーっとしているんです。不思議なことに、今はものすごく達者なのに、口が達者じゃなかったんです。それで、相手方が何か言ったときに、ユーモアを持ってパッと対応できるような子じゃなかったんです。真面目でだめなんです。それで女房と心配しまして、このままではいけない、何とかしてはいけないと考えていた。そこへ息子の友達に女の子みたいな顔をした、かわいらしい、優しい坊やがいて、それでその両親がやはり、このままではいけないと心配している。

幸い、その友達の団地の上の階に、自衛隊の剣道七段の教官がいらっしやいまして、「武徳会」の出身なんです。それで、その友達のお母さんが、その先生に、うちの息子に剣道を教えてくれませんか、と頼んだ。そうしたら「十五人ぐらい仲間を集めてきたら教えてもいいですよ」という答えだったということで、その友達のお母さんからうちの女房に話があって、それで息子に聞いてみますと、強制したわけでもないのに、やるよ、と言います。しかも、やりだすからにはちゃんとやらなければだめだよ、と言ったら、やる、と言います。それで十五人ぐらいが何と、小学校の屋上を借りて、あのざらざらしたコンクリートの上で練習を始めたのです。まだ小学校の四年生だから、やわらかい足にまめができて、そのまめがつぶれて、そこへまめができて、それがまたつぶれて、もう見るのも痛々しいような足をしながら、しかもだれもやめないで、ずっとやっているんです。

その武徳会の先生が、勝負はどっちでもいい、剣道は「心と型」だということで、徹底的に型を教えてくださいました。ですから、全国大会なんかに出て勝った経験はないのですが、中学で剣道部に入り、三年で初段を取り、後攻でも剣道部に入って卒業

するときには三段を取ったというようなことがありました。

私たちは、この子はいじめられっ子になると心配したんです。小学校で一年から六年まで、運動会で百メートルの徒競走が六年間ビリなんです。六年まで、重たくて鉄棒で逆上がりができないんです。息子はそれをあまり気にしているふうではなかったけれども、やはり男ですから、劣等感を持っていたと思うんです。しかも、ぼーっとしていますから、いじめるのにちょうどいいやつだったんです。ですから、そのままだったら、きつといじめられたでしょう。いじめられても、それを克服する人もいますが、それによって人格がひん曲がってしまうことも大いにあり得るわけで、それを心配したのです。

ところが、やはり剣道をやっておりますと違ってくるんです。そこか背筋がぴしっとして、どこか人間に迫力が出てくるんです。中学に入って剣道部に入りますと、防具を担いで毎日学校に行きますから、それに恐れをなしたこともあったかもしれませんが、でも、ついにいじめられっ子にならずに、しかも、その武道による非常なプラス面を身につけて、少なくとも高校で剣道三段になるまでは、ずっとやっていった。それで、大学在学中にまたドイツの大学に二年間入ったんですが、そのときドイツの大学から依頼されまして、一方で学生であるのに、学生に剣道を教えてくれと言われて、三十人くらいのドイツの学生に剣道を教えたということもありました。そのときの仲間と今でも手紙のやりとりをしているというふうな大変な副産物にも恵まれたのです。

あれをやらなかったら、息子は必ずいじめられておかしい人物になってしまっただろうと思います。今は幸いに、早稲田で教授として、不思議なことに当時はぼーっとしていたのが、本当に切れ味のいい論客になっているんです。私は、これが人を生かすということではないかと思うんです。息子は剣道によって救われた、つまり「生きた」と思うんです。

武道学科をつくって、単に武道の技術ではなくて、そういう型と心を教えられる人材をたくさん国士館から生み出す。これは、その人がいなければ精神的に死んでしまう人を救う、人を生きさせるということになるのではないだろうか。

高校の通信制もそうです。いじめにあった子供の心を考えると、実に悲惨で、気の毒で、かわいそうです。むしろ、学校に行きたくないければ、行かなくてもいいよ、こっちに来なさい、というところがあるのもいいのではないだろうか。もし、そのままであったならば、優れた才能を持ちながら、その才能を生かせずに、社会の片隅に埋もれてしまう。それを救い出して、その才能を再び生かせるようにする。これは人を生かすということになるのではないだろうか。

●国を活かす

アジア学部は、必ずしも人を生かすことにはならないだろうけれども、日本は今、どうでしょうか。日本は今、戸惑っている。どちらに行ったらいいのか、右顧左眄^{うこさへん}している。今、日本に国家目標があるのだろうか。終戦直後の、あの飢餓^{きが}、貧困から出発して、十年ほど前まではとにかく豊かな平和な国をつくろうという目標があった。昭和四十年代、五十年代にその目標に到達したが、むしろ、その到達した目標からいろいろな弊害が出てきてしまった。次の目標は何だ。今、国には目標はない。若者がしらけて、背を向けるのは当たり前なんです。国家目標がないんです。どちらに行っていくかわからない。たくさん問題を起こしながら、それが解決できない。その筋道がまだ定まっていけないのが、今の日本ではないだろうか。

アジア学部は、結局、こういう考え方になるのではないか。日米関係は少なくとも当分の間は大事だよ、アジア太平洋という觀念も大事だよと。それを排斥したり、批判したりすべきではない。けれども、世界の大国であるお隣の中国。世界の古代文明国家の中で、途切れ途切れながら現代まで古代文明が生きている国というのはほかにないんです。ほかは全部途絶えた。中国だって百五十年途絶えたから中国の古代文明は途絶えたというのは日本人の見方であって、中国人の目から見ますと、たった百五十年しか途絶えてないじゃないか。そう言われてみますと、中国の長い歴史の中で、二百年、三百年途絶えたけれども、次に前にまさるとも劣らぬ非常に高いレベルの文明を生み出している。それがずっと続いている。アヘン戦争まで続いている。すごい国です。ただ、あまりに大きすぎるために、そう簡単に超大国になれない。中国がどうなるか、よくわからない。非常に危険な可能性もある。

しかし仮に、今のまま右往左往しながら、政治と経済の間の矛盾をうまく克服しながら、政治的経済的に発展していったときのことを日本は考えていかなければいけない。そのとき昔の遣唐使のように、中国に学生が留学するばかりということであってはいけない。アジアの共存共栄のために、日本のやることは確実にある。それは昔の大東亜共栄圏のように、日本人は優れた民族だからアジアの盟主としてアジアの諸国を植民地から開放するという問題ではない。そうではなくて、いろいろなラッキーなことがあったために、日本はアジアの中で最初に、いわゆる経済大国になり、技術大国になった。さらに、例えば、欧米の文化、学術との接触の分厚さ、これはアジアの国の中では際立っている。しかも、欧米と深い人脈を持っている。そういう国としての役割があるは

ずだ。盟主ではなくて、世話役という役割があるはずだ。その辺に国家目標を定めるべきではないだろうか。

サミットの中で日本だけがアジアから参加している。それは、アジアを見下す酔うなことではなくて、いわばアジアの代表ではなくて代弁者としての日本の役割があることを意味しているのではないか。したがって、もしアジアの国の中で、これをやりたいという要望があって、それがまことにそのとおりだと思われるときには、全力を振り絞って欧米諸国を口説き落とすという役割をするのが日本ではないだろうか。欧米の国がアジアに対してある要望を持った、その中に不合理で、すぐ取れないものがあった場合には、日本は進んで、その人脈を利用して欧米諸国を戒めるべきではないだろうか。逆にもし欧米の言うことが正しいと思っただらば、日本はアジアの世話役として、その国にこうだよと言って、改めてもらう努力をすべきではないだろうか。そういう立場をはっきりとさせるべきなんだと私は思うんです。

今、総理が外国に行くたびに、あるいは天皇が外国に行かれるたびに、謝罪をしなければいけない。実はそんな問題ではないんです。太平洋戦争、第二次世界大戦のときに、周辺諸国にいろいろ迷惑をかけた。それは大変なことだったのです。けれども、それは申し訳ありませんなどという言葉でもって済む問題ではないんです。でも、なぜアジアの国々が、謝れ、謝れと言うのかというと、謝罪していないという問題よりも、むしろ、日本はアメリカの方ばかり見てアジアのためにやっていないではないかということなんです。ですから、先ほど申したように、日本はアジアの代表ではなくて、アジアの代弁者として、欧米諸国を口説き落とす努力を積み重ねていけば、そういう問題は自ずと解消するんだと私は思うんです。

アジア学部。これはまさにそういう日本の進路を示す学部であるべきであるし、あり得ると私は考えています。それは、先ほどの「人を生かす」という言葉を応用していうと、「国を活かす」ということになるのではないだろうか。「人を生かし、国を活かす」。これが国士館の一つの目標といえるのではないだろうか。こういうふうに考えたわけであります。しかし、この言葉を一西原が言ったのでは、全学のご了解を得ることはできません。全学の思想になり得るためには、やはり創立者の言葉を借りなければいけない。

私は恐らく、「人を生かし、国を活かす」という考え方は、創立者はお持ちだっただろうと思ひ、国士館の歴史に詳しい何人かの方々に、その言葉を使っておられないか探してくれとお願ひしたし、私自身も再び柴田徳次郎先生の言行録を読んで、残念ながら、今までのところ、「人を生かし、国を活かす」という言葉そのものは発券できないのですが、もしお気づきの方があつたら、お教え

いただきたいのですが、それと趣旨において、ずばり同じ言葉を発見しました。

それは大正十五年に出版された、創立者の講演集、薄い小冊子ですが、『國土館と教育』という冊子の五十四ページに、こういう言葉が出ています。「国家が教育を施す目的は、人を作り、国を興すにある。」ただ、この言葉はかなり一般的です。つまり、どの大学の学長、理事長でも言えるようなことであり、だれでも言える言葉です。「国家が教育を施す目的は、人を作り、国を興すにある。」一般的ではありますが、私がドキッとしたのは、それに続く創立者の次のような言葉です。然るに「今日の実際は、人を殺し、国を亡ぼしている」。私はこの言葉を発見して、はたとひざを打ったんです。その趣旨は、日本という国の教育がこのままであると、日本国民は死んでしまう、国も亡んでしまう。そこで、國土館が新しい教育を展開して、死にそうな人をよみがえらせ、亡びそうな国を生き返らせる、これこそ國土館の教育だという、創立者の心意気がそこにあらわれているということを感じたのでございます。たまたま、私が國土館の使命として実践しつつあった「人を生かし、国を活かす」という考え方は、何とまさに創立者の思想そのものだったことを確認をして、私は大変感動いたしました。

私学の特色というのは、建学の精神に基づいて個性的な教育を行うところにある、という言葉はだれでも知っているところであります。難しいのは、この建学の精神のあり方でありまして、建学の精神を尊重するということは、創立者の言葉をすべて実現することのように思われますが、実は決してそうではなくて、むしろそうであってはいけないという面があるのです。なぜならば、創立者の言葉というのは、必ずその時代の状況を前提にしているからです。そして、時代は流れ、変化してきました。そして、学校というものは、常に世に先駆けたことをしなければいけないとするならば、創立者の言葉を全部、今の時代に実現するのは適当でないということになる。これは決して創立者を軽んずることにはならない。むしろ、創立者を重んずることになるのだと、私は考えております。

それでは、創立者の思想は全部無視していいかというと、そうではありません。戦国時代のような今の世の中であって、一つの学園が輝きを保つためには、その学園が、ほかの学園にはない個性を思っていることが必要であることは言うまでもありません。そして、その個性というのは、その学園にとって取ってつけたものであっては決して輝きにはならないと私は思います。取ってつけたものでないということは、とりもなおさず、建学の精神に基づく伝統を強烈に保持していること。それでもって初めて個性が

輝くんだと考えます。

昨年の同窓会でも申し上げたのですが、私は建学の精神ということについて、非常に長い間考えた末、こういう結論に達しております。建学の精神を知るためには、昔に帰らなければいけない。しかし、建学の精神を重んずることは、昔に帰ることではない。大事なのは建学の精神の二十一世紀的発想形態、二十一世紀には創立当時の建学の精神がどういうあらわれ方をすべきか、これをたずねる。建学の精神の二十一世紀版、二十一世紀的発想形態を探し求めて、これを実現するのが建学の精神を重んずることだ、こう私は考えております。

そういう点から申しますと、元来、物質文明のみが栄えて、精神文明が軽視されている風潮を憂いて、物質文明を指導すべき精神文明を強調するところに、国士館の建学の目的があった。このように言うことができます。その証拠に、大正六年に発表された「国士館設立趣旨」は、まさにその言葉から始まっているからであります。「物質文明を指導すべき精神文明と精神教育を強調する」という大目標から次に、「科学智に偏らない真知識の養成と徳性の涵養」ということが教育の中心的な目標となって、そして今日に至っているのだと考えております。

大正六年に創立者が憂いた当時の社会現象は、今や当時とは違って形で、しかし、当時以上の深刻な弊害を伴って人類に襲いかかっていることができると思います。その真ただ中にいる我々は、今こそ再び創立者の憂いを憂いとして、その「志」を今に実現すべく渾身の努力を傾けなければならぬと、改めて考えているところでございます。

創立者は言われました。「教育の目的は、人を作り、国を興すことである」その意味内容は、殺された人を生き返らせる、あるいは殺されようとしている人を救い出す、死んだ国、死にそうになっている国を立ち直らせる、そういう意味を込めて、「教育の目的は、人を作り、国を興すことだ」と言われました。

今、私たちが計画していることは、先ほど来、ご紹介をしている幾つかの計画も含めて、まさにその創立者の思想の二十一世紀的な実現に、たまたまでありますけれども、合致していると思っております。しかも、「人を生かし、国を活かす」という私の言葉は、単に新しい学科、学部をつくるときの理念だけではなくて、日ごろの研究教育での理念でもあるのではないだろうか。のみならず、卒業生の方々が国士館で身につけた国士館の精神をもって、それぞれのお立場で、職場で働くときの理念にもなるのではな

いだろうか。「人を生かし、国を活かす」ためのご努力を心から期待し、お願いを申し上げまして、私の講演を終わらせていただきます。大分時間が超過いたしました。が、ご清聴を心から感謝いたします。

(平成十一年五月十六日 ホームカミング・デイ)



アジアの世紀を演出する国士館

―統合に向かう世界にあって大学は何をなしうるか―

国士館大学は、今年で創立八十五周年を迎えることになった。資本主義が急速に発達し、科学技術や物質文明の発展に限りない期待が寄せられていた時代――大正六年（一九一七年）、柴田徳次郎が「教育における精神文明の重要性」を唱えて創立した私塾国が、国士館大学の基である。以来、国士館大学は「知徳体のバランスのとれた人材の育成」を教育の根本に据え、アジアにおける日本の歴史的な意義と役割を常に追求しながら、多くの人材を育ててきた。さて現代社会をみると、物質万能の精神風土が蔓延し、進歩・向上で、人間の退廃、教育の荒廃が叫ばれている。その中において、国士館大学は、自らをどう位置づけ、どのようなビジョンを示し、いかなる人材を育成しようとしているか。社会にいかなる貢献をしようとしているのか――。平成十年に学校法人の理事長に就任し、大改革の舵取りにあたっている西原春夫理事長に、国士館のビジョンを語ってもらった。

日本の病を救う活動拠点として

私が本学に招かれたのは、平成十年の四月ですから、はや四年が経過しました。

そのころ私は、日本が重い病にかかっているかと思っていました。政治や経済や外交が病んでいるのみならず、最も深刻なのは「心の病」にかかっているということです。しかも日本人がそのことに気づいていないところに、病の重さがあると考えていました。

この病を治すにはどうすればよいのかと考えているところに、縁あって国士館から招かれたわけです。そこで私は、国士館とはどういう学園であるのか、その歴史と現状について勉強しました。最初に目について驚いたのが大正六年、国士館が設立された時の「設立趣旨」でした。そこには、私が近年の日本の教育について考え憂えていることがまさにずばりと書かれていたのです。

「物質文明の弊、日に甚だしく、人は唯だ科学智を重んじて、徳性の涵養を忘る。（中略）精神文明なくして国家、あに一日の安きを得んや。けだし、精神文明は物質文明を統一指導するものなり（中略）吾人は精神文明と精神教育とを此際に唱道して、国家の柱石たる真智識を養成せんことを期す」（物質文明の弊害は日に甚だしく、人はただ科学的な知識を重んじて、徳性を養うことを忘れている。精神文明なくして国家というものは安泰ではありえない。思うに、精神文明は物質文明を導くものである。私は精神文明と精神教育とを唱道して、国家の柱石となる真の智識を養成する。

これは大正の初めという時代の状況を前提にした主張ですが、創立から八十六年たった今も、寸分たがわず当てはまるではないですか。

このことばに接したとき、重い病気にかかり始めた日本を救う活動の拠点として、国士館は数少ない学園の一つではないか。このように私は考えたのです。

相互理解と歴史的な共通認識をもつこと

私は国士館大学に籍を置く前に、ヨーロッパに三年間滞在し、ヨーロッパが一つに統合されるのを目の当たりにしてきました。そしてヨーロッパが様々な問題を抱えながらも統合を実現し、経済、文化における新たな枠組みを創出しているのをみて強く実感したことがあります。

それは、共通性のある地域での国家統合—これこそ二十世紀から二十一世紀にかけての人類の新たな歴史形態であり、人類は必然的に地域統合への道を歩んでいくということです。

大きな歴史の歯車は、異なる文化間の融合と強調、さらには統合の歩みに向かっています。それはヨーロッパだけのことではなく、アジアも決して例外ではないとしたら、日本の属するアジアはいったいどうなるのか、日本はいったいどうなるのか。私はそ

のことを深く考えました。

このように歴史的な背景をとらえたとき、いったい大学は何をなしうるのか。これは単に一大学の取り組みを超えた、二十一世紀の高等教育全体の大きなテーマとなると思います。

地域統合への道が世界的な必然な流れだとしても、現状は、各国の相互理解はあまりにも乏しいと言わざるをえません。そのため、うわべだけの断片的な報道や知識で、アジアや隣国を認識してしまうことがあります。

そのような愚を避けるためにも、日本人学生も留学生も、お互いの国のことをよく知っておく必要があります。相手国の文化に対する理解と同様の重さをもって、日本の文化・伝統を理解していくことも極めて重要です。「自国を知り、他国を知る」ということです。これが、まずなすべきことの一つです。

もう一つは、アジアには独立を果たし、内線が終わらせてから、三〇四十年しか経っていない国が多く、まだ国づくりの途中にあります。そうした国々では、何よりもまず自国の発展が第一なので、ナショナリズムが強いのは当然です。しかし人類が統合の方向に向かい、アジアもまたその軌を一にするならば、そういった共通認識を持って今後に臨むかどうかでは大きな違いが出てきます。少なくとも、将来各国を担う若者たちには、そういう共通認識を持ってもらいたい。

相互理解と共通認識—それを深めること、これが統合に向かう時代の大学の本質的な目的であり、昨年、新たに創設した「21世紀アジア学部」のもっとも重要な意義でした。

アジア発のグローバルスタンダードの創造を

「二十一世紀アジア学部」では何を学ぶのか。教育の要におくのは、総合的コミュニケーションの能力です。しかし、その真意はもっと深いところにあります。

学生の二割以上がアジア地域からの留学生で占められており、ともに日本文化の根底を知るとともに、等しくアジアの各民族が育んできた文化の根底を知り、同じアジアの人間としての共通理解を促進することが求められます。

その上で、最大の眼目となるのは、これまでの欧米の価値観とは異なる「アジア発のグローバルスタンダード」を創造し、社会

に、そして世界に貢献することにあります。

今、世界を覆っているのはアメリカの価値観です。それは物と金とに最高の価値を置く物質至上主義であり、弱肉強食を是認する市場原理、自分の正義を普遍的正義として押し付ける横暴なアメリカン・グローバルスタンダードの波です。そして日本は、戦後世界の中で最もアメリカに追随してきた国と言わざるを得ません。

戦後、日本が追求してきたものはまず豊かさでありました。敗戦によって無一物になり、食べるもの、着るもの、住めるもの、それを得ようとして懸命の努力をしてきました。しかし、それらが得られるようになっても満足しませんでした。さらにもっといいもの、もっといいものと求めるようになり、豊かさの追求は物質至上主義に到達してしまいました。物質的な豊かさが幸せをもたらすと考えてしまいました。

それは別な言葉で言いますと、「むさぼりの精神」といつてもいいかもしれません。飽くなきむさぼりの心には、真の幸福はありません。欲望は肥大化してますます飢餓感が訪れ、精神は荒廃していきます。

戦後日本人が求めたもう一つのもは「権利」と「自由」でした。本来、権利や自由は大変厳しい概念であり、それを行使する者は自らの限界を提示した上でなければならぬはずだったのです。

しかし戦後の日本人の考えた権利と自由は、自ら柵を設けるのではなくて自分の欲望の自己実現を強調する手段として用いられてきました。「もっと権利を認めろ」「もっと自由を認めろ」—それは言い換えれば、「私の欲望をもっと認めろ」という「むさぼりの精神」だったのではないのでしょうか。

戦後に日本人が世界から高く評価されていたものは何だったのでしょうか。それは、「心の気高さ、謙虚さ、つつましき、しとやかさ」だと思います。これらは、人に言われて律するのではなくて、自ら欲望を制する心のあり方です。これが日本人の美しさとして、世界から評価されていたのです。そういった大切な心を日本人は戦後に失ってしまったのです。

最近、マスコミをにぎわすいろいろな事件を見ると、日本人はいかに自制力や欲望制御能力を失ったかということが現れています。欲望制御能力の喪失—これは戦後日本が豊かさと権利と自由だけをとことん追求してきたことの哀れな結末の姿と言わざる得ません。

戦後の日本は、神とか仏とか、絶対者への畏れという心のあり方を否定してきました。個人の理性だけでものごとが処理できるという傲慢な思想の持ち主になってしまいました。理性でものごとを解決するのは欧米もその考え方を取っていることは言うまでもありませんが、それを言う欧米にはキリスト教の倫理がなお強く作用しており、そのうえで権利と自由を主張しているのです。そのことを日本人は知りませんでした。その信仰の面を排除して、権利と自由を強調してきたところに、戦後日本の問題があると私は考えております。

「心の気高さ、謙虚さ、つつましさ、しとやかさ」が失われた原因は、人間というものがいかに未完成で無力な存在であるかということ、意識しなくなったためではないでしょうか。

しかし、事態は絶望的なわけではありません。日本人は一見、無信仰、無宗教のようにみえながら、絶対者と自分を結びつける能力を持っています。そのことは例えば、初詣の参拝者は三日間に何と八千万人、日本人の四分の三が、お寺か神社のどちらかに行って一年の誓いを立てお願いをするとところに表れているように思います。日本人はもともと絶対者への畏れ、その前での人間の至らなさの自覚、生きていることへの感謝、そういった気持ちを抱くことのできる民族であったと私は考えております。

国士館は特定の宗教を教える学園ではありません。しかし、そういう問題意識を、はっきりと持った学園であると言えます。

物質文明を指導するのは精神文明である。その精神文明と精神教育とを教育の根幹に置く。これが国士館の精神でした。武道を重視してきましたが、本来それさえ超えるものでした。

ポスト資本主義を模索するホーリスティック（全体的）なアプローチは、さまざまな分野で試行されていますが、国士館大学の目的は、まさに東洋の歴史が育んできたホーリスティックな思想を基とした二十一世紀の価値観を養い、世界で活躍する人材を育てることにあります。

動きはじめた東アジアのネットワーク

これまで日本は、少なくとも戦後、中国を含むアジア諸国を全体として正確に見ることがありませんでした。そのため、中国のいち早い行動力にすでに遅れを取りつつあります。日本は自分の行った過去との関係で臆病になりすぎていたか、あるいはアジア

に対する先見性を欠いていたために、今や中国の後追いをせざるをえないような事態が起きています。

日本のアジアに対する認識の稀薄さを前にして、私は、近年、国や政府ではできない、あるいはやらないことの中に、民間の立場から為すべきことがたくさんあるのではないかと強く思うようになりました。

むしろアジアの統合のような動きは、各国首脳によるトップダウンではなく、市民レベルで自然発生的に沸き起こることが望ましいと思っています。さもないと、外交交渉のテーブルで話し合われるような政治課題に貶められてしまうからです。

こうした思いを少しでも形にすべく、この半年の内に、国士舘大学は北東アジアの著名な四つの大学と重要な協定を結びつつあります。

その大学とは、一つは極東ロシア・ウラジオストクにある極東国立工科大学、そして中国東北部吉林省の省都・長春にある吉林大学、モンゴル国立大学、そして現在交渉中なのが、韓国の一大学です。吉林大学は学生数七万人を超える中国最大級の規模の大学です。この吉林省は東に朝鮮半島が連なり、西にモンゴルが広がるなど地域的連続性が高く、かつ近代の歴史の中で、ロシア人や日本人とも浅からぬ縁を結んできました。これらの地域特性を活かせば、北東アジア各国の大学交流の核をつくるのは最適と考えました。

国士舘大学は、これら四つの大学それぞれとの交流協定とは別に、五大学の「協力協定」を目指しつつあります。どこにでもある二大学の間の「交流」ではなく、五大学の「協力」協定です。いわば五カ国五大学連合です。

これはアジアが一つのブロックを形成して、政治・経済・文化面に独自のモデルを発信していく礎となる研究協力体制です。これから迎えるであろう統合の時代に、まず北東アジア各国がかかえる問題を共に解決するための共同研究を行うのです。アジアにとって重要な共通の課題に協力して取り組むネットワークの構築をめざすのです。

そのため、この五大学がそれぞれの国の幹事校になって、中国、韓国、モンゴル、極東ロシア、日本の各大学・研究機関にこの枠組みを広げていくとしているのです。このフレームには、五カ国のみにとどまらず、近い将来、台湾の大学も参加し、漸新的に東アジア全体に広げていく構想が進んでいます。

そうなれば、大学を拠点とした東アジアの協力体制ができあがるわけです。極東アジアの共通の問題、さらには将来の統合に向

かつて歩む過程を共同で研究していくのです。その基本理念は、欧米型グローバルスタンダードとは異なるアジア型のモデルを形成することにあります。

大学だからこそ可能な社会貢献活動がある

こうした連携は、はじめから政府レベルで行うのは必ずしも適正ではありません。なぜなら、それはアジア各国の主導権争いや、欧米との対立の原因になるからです。民間の、それも大学だからこそなし得ることがあります。

政治的な足かせもなく、経済的利害とは無縁で、研究者や教育関係者同士が自由に交流できるのが大学の強みだからです。国家ではなく、企業や経済団体でもなく、大学だからこそできる国境や民族を超えたネットワークがあるのです。これは大学が担うべき国際的な社会貢献活動の人等の例となり得ると思います。

さらに国際貢献という面でも、経済支援だけではなく、日本の特色を活かした文化的・学術的な国際貢献もなし得るのです。そしてこれを、国が財政面を含めて支援するのが、もっとも望ましい形です。

NGOの活動が大きな意味を持つようになってきていますが、大学の社会的国際的な活動の必要性もまた高まってきています。国でなければできないことがある。しかし、逆に国ではできないこともある。そうした活動の拠点に、大学はなるべきだと思うのです。大学は学問の場ですから、偏りなく、客観的に物事を考えることができる。わだかまりなく、国境を越えることができる。そういう意味で、大学が、より積極的な活動をしていかなければならない時代ではないでしょうか。

国士館には国士館がやるべき活動があります。それが「アジアの中の日本」という視点で物事を深く見つめるとともに、アジア、そしてもっと広く人類のために貢献する新たな方法論を講ずることだと思ふのです。

近い将来、中国のみならずアジアは世界経済の中にあって大変に重要な役割を演ずるようになります。アジアというものが、一つの塊として、現実の政治、経済、外交などに影響力を持つということは、人類の歴史の中で初めてのことです。その時に、アジアはアジアなりの倫理観といったしっかりした裏付けをもって行動していかなければならない。そのためには、アジア・オリジナルの共通の価値基準を作っていかなければならないと考えます。

そして今起こりつつあるキリスト教・物質文明とイスラム教・精神文明の、一神教に根ざした衝突という危機に対して、日本は和の精神と文化交流を通じて、せめて今ここにある危機の緩和に貢献しなくてはいけないと思います。

現実問題として、今後あの統合が進のはまず間違いないところであり、それを担う人材が必要なのも議論を待たないと思います。国士舘大学はそれを推進する拠点でありたい。そしてさらに進んで、アジアの発展や平和に対する日本の役割を民間の立場からささやかながら担うという、大きな使命を併せ持つべきであると考えています。

国士舘はそれをやろうとしているのです。国士舘は、そのための拠点でもあり、そういったものの見方ができる人材を育てていく場なのです。こうした世界観とフィロソフィーが国士舘にはある。それこそが国士舘の新たな個性になりうるものだと思います。



日本における国士舘の役割

社会の背景にあるもの

西原 子供達、若者の中には本当に素晴らしい人達も多いということを前提にしてお話します。

最近の異常とも言える「人間の心のないような犯罪」、これは子供だけではなく大人にも増えてきた。この傾向は、ある程度一般的傾向で普通の子供達にも内在しているということです。私はそういう意味で、「日本社会の病は重い」と見なければいけないと考えています。それを改善することが教育の大きな目的であって、これは相当ふんどしを締め直して掛からないといけないと思っています。

さて、子供や青少年の意識、行動をどう見るか、いろんな切り口がありますが、先程、同窓会長が「我慢ができない子が多くなった」ということを言われましたが、まさにそうで、「欲望制御能力の低下」がもっとも本質的な特徴であると思っています。それは直接的には、会長が指摘されたように、幼児期における家庭環境に大きな原因がある。少年非行とか犯罪の大部分は家庭環境に問題があると言われていますから、やはり日本の社会としては全力を挙げてそれをどうするか。これは個人のプライバシーの問題が

ありますから大変難しいのですが、そこに手を掛けない限りは駄目だというのが、私の考え方なのです。

なぜ欲望制御能力が低下してきたかというと、その背景には、二つの面があります。一つは最近の社会の中に、青少年に対して有害な環境がいろいろと出てきたというような社会の変化が原因になったと見られます。第二に日本の戦後社会の、在り方全体がその拝啓なのだという見方をしなければいけないと思っています。それでないとい根本的改革ができないのです。

戦後社会の特徴は何だったのか。もし五十年、百年後の歴史家から見て、一九四五年以来の日本社会の在り方の特徴は何だったかという、一方において「豊かさの追求」を行ってきた。他方においては「権利と自由の確立・普及」に全力を挙げてきた。しかもそれによって日本の国民が非常に幸せになったことも事実であります、そこに実は問題があった。

「豊かさの追求」と「権利と自由の追求」というのはまるで無関係に見えますが、実は共通分母があるのです。それは両方とも「欲望開発原理」に立脚しているということです。なるべくいいものを欲しい、たくさんものを欲しいというのが豊かさの追求でしょう。権利も自由も、自分の欲望実現を制約するものは減らせということなのです。自分の権利を、自由を、もっと認める。本当はヨーロッパで発達した権利とか自由という概念は、そんな生半可なものではないのです。実は非常に厳しいものを含んでいるのですが、戦後日本人が教わった権利と自由というのは欲望開発原理なのです。

言うまでもなく、本当は社会というのは欲望開発原理だけではやっていけないのです。「欲望制御原理」が働くシステムがなければいけないし、普通の国にはある。ところが戦後日本はそれを軽視したというか怠ってきた。そこに問題があるということなのです。戦前には戦前なりの道德の体系があって、それが機能していた。

しかし、そういう日本の戦前の道德体系の中にも、今の時点から言えば問題はあった。あまりにも封建主義的だったり、非人間的だったという側面があった。のみならず、戦前の道德体系は、明治以来の国家政策、とりわけ大正・昭和期における、軍国主義的な国家政策によって利用されてしまった。従って、とても戦後これを認めることはできないという面があったことは否定できません。

そこで日本人は少なくとも社会の表面からは全部放り出してしまった。しかし社会の奥底には存在していたわけです。例えば、おじいさん、おばあさんが「そんなことは人に道に外れるから駄目よ」と言って子供を教えることはあった。例えば飲み屋のマダ

ムの方が、テレビで講演をしている学者よりも、大事なことを教えることが多かったと私は思う。人生についてはそういう人たちのほうがむしろ大事なことを教えていたとさえ思うのです。ところが、社会の表面、例えば学校教育などといった社会制度の表面からは投げ捨てられてしまった。

私は、権利と自由を与え過ぎたから駄目になったという言い方ではなく、権利と自由を強調すればするほどそのわきにある、つまり憲法を頂点とする法体系の隣に、結果として欲望制御原理を含む、ある種の道徳体系が強くなるべきで、それがなければいけなかった。それがなかったところに問題があったと考えているのです。そうだとすれば、それを再構築しなければならないというのが私の考えです。私はそこに国士館教育の出番が来たと思っているのです。

西原 私は今、人類全体もそうだし、また日本も大変重い病にかかっていると思っています。これに対して、小さいとはいえ、国士館ができることがある。私は、そういった病から救い出すのに、日本人、あるいは人類を救い出すのに、国士館にやれることがあると思っています。これは国士館構成員全員が、そう考えるべきだし、この構成員の中には、卒業生も入っているのです。

国士館は武道を重んじてきた。なぜ武道を重んじてきたのかという思想の原点を探てみると、やはり今の日本の教育で欠けたものがそこに出てくるのです。例えば、武道には「礼に始まり礼に終わる」という本質があり、つらいこともやらなければいけないし、痛い目にも遭うわけです。そういう経験が若者には必要なんだということをはっきり表しているのです。

剣道というのは暴力と暴力との戦いみたいに見えますが、実はそうではなく、剣道の本質というのは、刀を持っているのに刀を抜かない、その心構えを養うのが剣道だという考え方でしょう。そういうものを日本は必要としているのです。それを国士館として強調し、日本の教育の中でそれを普及させようじゃないか。だから、剣道連盟、柔道連盟の人たちも、簡単にはいかないけれども、学校教育における武道の必修化という方向に近付けようと努力すべきなんです。それを国士館が大いに言うということはできるわけです。

その国士館でも、以前は大学でも剣道と柔道が必修だったのですが、学生数が増え、女子学生も増えたという中で中学・高校以外、必修でなくなってしまった。

国士館教育の出番

そこで、新設の二一世紀アジア学部では、武道六種目、茶道・華道・書道・日本舞踊などの伝統芸能六種目、合計十二種目の「伝統諸道」という科目を開設して、いずれかを必修としました。それを実戦しなければ日本のことはわからないという認識なのです。この二一世紀アジア学部における成果を見ながら、全学部の導入教育の中に、国士館独特の思想を新しい形で再構築すべきではないかと思っています。

ただ、国士館は武道の強いだけの学園になってしまったのでは、武道を強調する効果がなくなってしまいます。教育水準の高い学園でありながら武道を重んじているという印象にならなければなりません。それへの努力、これが国士館にとってのみならず、日本にとって必要なのです。

和 私も学校で柔道を教えているんですが、海外では以前から日本の柔道を、自分の身は自分で守るという、つまり護身という形で必修にしているところがあるそうです。一番手ぬるくやっているのが日本かもしれません。武道というのはあいさつから始まり、礼儀、作法等をしつかりと教えられるんです。武道教育を活かすことは今の若者に必要なことだと思います。

若者の生きがいとやりがいをアジアに

西原 日本は実は世界で一番豊かなのに、若者に目標がない。他のアジアの国々の若者は、これから国を発展させなければいけないという使命感を持っているので、皆、目が輝いているのです。ところが、日本はもう行き着くところまで来てしまった。私は日本という国境の中だけでもを考えている限り、若者を奮い立たせるものはないと思っています。これを何とかしなければいけないと考えてみると、そこにまた国士館のもう一つの在り方が出てくるのです。

大正六年の国士館創立当時、日本はアジアに大きな関心を持ち、アジアへの貢献を国策としていました。国士館の設立も、それと無縁ではなかったのです。しかし、当時は、日本が盟主となって、あるいは強い軍事力を背景として大東亜共栄圏を作ろうということでした。しかし、今やアジアは人類の文明史上大変な意義を持っていることが最近明らかになってきたのです。

日本人は明治維新以来、体半分か、あるいは三分の二ぐらい欧米的なイデオロギーに体を置いています。欧米的なイデオロギーが、いわば人類の理想のごとく思い込んでいたわけです。

ところが、一昨年の九・一一、ニューヨークの同時多発テロ以来、アフガニスタン、パキスタンにおけるイスラムの人たちの生

き方を見て驚いたんです。イスラムの人たちの行動の対比において、われわれが身を置いている欧米的イデオロギーというのは、キリスト教世界にもかかわらず、実は先程言った「欲望開発的な物質万能主義」であつたということに気づいたのです。

ところが、イスラム世界はこれとは正反對で、その本質は「禁欲的な精神主義」なのです。例えば断食Ⅱラマダン¹は神への帰依を妨げる世俗的な欲望、食欲、性欲、物欲、これらを抑制する象徴的な行為なんです。聖戦Ⅱジハードといわれるのも、実はそういう欲望を克服する戦いだということなのです。それは結局神への帰一を妨げるからです。

また、彼らの衣服を見ると、だれが金持ちかだれが貧乏か分からない。モスクでたくさんの人が並んで礼拝をしている。そこには一切の序列がない。地位の高低も貧富の差もない。こういうのを見て、われわれはびっくりしたわけです。イスラム世界にも問題が多くあることは事実ですが、このわれわれが足を置いている欧米的な価値観に対して、問題を突きつけられたように私は思うんです。

のみならず、実は、キリスト教もイスラム教も一神教なのです。二十一世紀は二十世紀の東西冷戦に代わって、その二つの対立が不安の根源になる。その兆候がもう現れてきているわけです。そのときに、人類が真つ二つになって、対立抗争したら人類は滅亡です。その間に立った第三世界が必要です。この第三世界になり得るのはどこかというと、日本を含む北東アジアしかない。北東アジアの人々の中には熱心なキリスト教信者もいるし、仏教徒もいるけれども、民族全体の特色として、一種の多神教的な、宗教的には寛容な気質がある。だからこそいろんな宗教が並立、両立できて抗争がないのです。

しかし、東南アジアにはイスラムがかなり入っているし、また一種の小乗仏教の堅い仏教があつて、その対立だつてある。またヒンズーとの対立だつてある。そういう点から言うと、日本を含む北東アジアの民族に、重大な文明史的役割があるんだということをも最近痛感しているんです。

一方において、経済協力機構のようなものから、いずれアジアにも共同体ができていく方向であるとするならば、日本は昔のように盟主ではなく、世話役として、それぞれの国ができる力を使って共にアジアを作り世界の平和に貢献しようじゃないかと呼びかける時が来たんだと考えています。若者にだって、日本人としてもやることがある。それを示すのは国士舘です。実は私は、日本の政府に先立って、そういう方向に行動を起こしつつあるのです。

今、北東アジアの国・地域を覆う協議機関は一つもありません。政治、経済、文化、警察、軍事、どの分野にも一つもないんです。初めて大学が作ろうとしているのです。去年の暮れまでに、北東アジア五カ国、五大学に対して趣旨説明を行い協力協定がほぼ結ばれようとしています。「北東アジア五カ国五大学連合」ですね。それぞれの大学は、一国から一つです。それは代表ではない。いわば幹事校、世話大学なんです。私が創唱者ですから、日本は国士館です。日本が本来やらなければいけない、あるいはアジアがやらなければいけないもの。国だとできないけれども、民間ならできる、大学ならできるもの、それを歴史に先立って国士館がやろうというのです。

教職員も学生も、そしてまた同窓の方々、関係者の方々にも、日本における国士館の、私の強調した二つの役割を大いに考えていただき、またそれを自分なりのできるところで実践していただきたいと思います。